

和 崎 春 日*
WAZAKI Haruka *



人類学方法論としての日本—アフリカ邂逅誌

—日本—カメルーン往還のフィールドワーク

Monograph of encounter and exchange between Japan and Africa as an Anthropological Method

—Fieldwork of ‘go and return’ between Japan and Cameroon

はじめに—対象と目的

人生に係らない科学的作業に意味があるのか

フィールドワークによる事実記述を、カメルーン—日本を結ぶ2カ国以上の、国際的な相互動態として描く必要があるのではないかと、いうテーマ設定とこれに迫ることが本稿の目的である。これについて私は、「アフリカの人たちとつきあい、その文化を描くということ」と題する論考において、アフリカの文化やそれを支える人々を前にして、観察者が価値自由な客観性を持ちえず、その時その場までに蓄積されてきた相互の関係と、その時その場で生成する対面的な関係状況とによって、事実のすくい上げのあり方が動態的に規定されてくる、という相互主観性について、論述した¹⁾。このことは、東アフリカ・スワヒリ社会への沈潜と個人的な人生の深まりにしたがって、その社会のなかでの自分の呼称がその都度きまっていき、その社会のもつ文化の読み取りもまた、自分と当該社会がともに創り上げてきたその歴史的共同によって、せりあがって自ずと可能になってくることを、和崎洋一は、スワヒリの生きる哲学として論じている²⁾。そして、そのことを、日本の祭礼をめぐる文化解釈をめぐつても、検証し考察した。つまり、日本を代表する祭りの一つである京都「大文字五山送り火」祭礼を対象

に、祭りの執行主体が、自分の意志だけではなく、信仰や観光の見学者の意志を汲み取りながら、自らの祭りの意味主張や自分の伝統文化の主張を信仰者や見物人とともに相互的に生成することを論じた³⁾。当該の相手社会だけではなく、自分（私、筆者）を含む相互関係を地道に描いていく記述またはエスノグラフィーの重要性をまず指摘したい。そのことをフィールドワーク誌としてここに実践し方法論として提示したい。以上が第1番目の目的である。この論の第2の目的は、交わる相手社会への学びの時間が蓄積され、その当該文化の獲得と自己身体化が増してくると、出会いが偶然ではなく必然化に向かうところがある、ということ論じたい。「出会いが出会いを呼ぶ」というテーマを本稿でグラフとして論じる。また、当該社会に長く滞在し、その地の価値観のズレに苦勞し、それに時にあらがい、それを乗り越え馴れんできた人類学のフィールドワーカーは、このテーマに向かい合える、また向かい合わねばならないのではないかと考えるのである。

1 邂逅の記述

1-1 「カメルーン—日本」往復の芸能者ヴァンサン—常磐津の師匠へ

今、日本のいろいろなアフリカイベントで活躍する芸能者ワッシー・ヴァンサンと日本との

*中部大学国際関係学部中国語中国関係学科

出会いは、カメルーン・ヤウンデの街区ンコンカーナの自宅にある。彼の母が営んでいた下宿屋には、首都ヤウンデの中下層の労働者もいた。ここからヤウンデの町中に働きに出るのである。ヴァンサンと母は、西部のバミレケの町バンガンテから首都ヤウンデにやってきた。1993年、この下宿屋に、日本からの私たちの共同研究者・野元美佐（現・京都大学准教授、現名・平野美佐）さんが下宿して、ヤウンデ都市の人類学的調査を遂行することになった。1994年に彼女が日本に帰国すると、彼はその伝手を頼って東京生活圏の埼玉にすぐにやってきた。そして、自らの音楽の才能を活かして、アフリカ音楽ツアーをカメルーンに送り込んだりして食いつないでいた。音楽資源は、家族の中にあり、兄がパリでカメルーン音楽のCDをリリースしていた。この時から、彼は、日本の伝統音楽への傾斜を強め、そのことが自らの日本での芸能経済活動を強めることを察知していた。そして、伝統音楽・常磐津の弟子入りを果たし、その名取にもなっていたのである。したがって、その後は、毎年5月に日比谷公園や横浜港赤レンガで行われるアフリカン・フェスタ（在日アフリカ大使館連合主催、外務省共済）のイベントでも、青山や六本木のライブハウスでのライブでも、常磐津演奏を混ぜたアフリカン・ミュージックを巧みな日本語トークショウのような形で演奏している。出回る公演のパンフレットにも、三味線を抱えた写真がよく載っている。カメルーンでの経歴が「カメルーン国立音楽学校卒」というふれこみで紹介されることもある。〈カメルーンーフランスー日本〉のネットワークを持つ。

このカメルーンー日本関係は、本人をはじめ、幾度にもわたるカメルーンーパリ経由ー日本の往来を通じて、何重にも強化される。何度も何年も下宿して博士論文の書きあげまでこのンコンカーナ街区と日本を往復した野元美佐さんも

そうだが、私も、この芸能人のカメルーンー日本のネットワーク強化にかかわったことがある。ンコンカーナに住む彼の母を帰国の挨拶に訪ねた私は、この袋を日本にいる息子に渡してほしいという宅配を頼まれた。しかも、この中味は見てはいけないという。中味は薬であって、包みを開くとその宗教的効力がなくなってしまうから、開封は絶対いけないと諭された。こうして、私もまた、なにやら宗教医学的なモノをカメルーンー日本間で運んで、彼のネットワークに乗ったのである。

次いで、野元美佐さんのカメルーンでの調査開始当時、日本女子大学大学院でその同僚だった塩谷暁代さんも私たちの研究プロジェクトの共同研究員としてやってきた。そして、野元さんが下宿するンコンカーナ街区のヴァンサンの隣の下宿した。われわれの共同研究の調査行が野元さんのンコンカーナ街区との出会いを開き、そこから日本への移動と働きかけがあり、それに乗って私が手伝いをし、またそこへ塩谷さんの新たな日本からのエネルギーが加重されていく。今度は、カメルーン共同研究プロジェクトの一員であり私のバムン研究の同僚でもある、元文化省の局長、今はヤウンデ大学で教鞭をとるルンベット博士とともに、野元さん、塩谷さんも一緒に、日本とヤウンデで開く研究会の相談に、ンコンカーナを訪れた。ルンベット博士は、私たちのバムン研究をめぐるバムン人共同研究者でありつつ、日本の国立民族学博物館の日本ーアフリカ・シンポジウムにも参加してきた、両国の架け橋となる重要な学者の一人である。そして、パリ大学に留学し博士の学位を得、省庁の局長にまでなった彼が、塩谷さんが下宿する家の長男坊の受験生、カメルーンの将来を担うべき若人に激励を送るという関係まで出来てきた。偶然の出会いが濃い人間関係を誘発していく。関係が多重的になって行く。

1-2 出会いの螺旋化

このルンペット博士とも、偶然の重なりとも言うべき出会いの重複がある。私は、この2年ほど前から、非常勤で岡山大学の人類学考古学教室の稲田孝司教授の誘いで、岡山大学で人類学を教えていた。その成績付けを行ったり、その後の学生の進路について教授と相談したりした後、つまりこうした教育仕事を終えて、カメルーンの調査研究に来ているのだった。

ルンペット博士は、若き学生のとき、パリに留学した。パリ大学で人類学・考古学・博物館学を学んだ。このときパリ大学の大学院で一緒だったのが、同じ専攻で人類学・考古学・博物館学を学びその学位をとったアレクサンドラ夫人である。こうして、ルンペット博士は、この3つの複合専攻の博士の学位を取得して、パリからカメルーンに帰国し、国家公務員となって文化省の局長にまで登り詰めた。このとき、日本では国立民族学博物館の吉田憲司教授が、アフリカ諸国とフランス、イギリス、アメリカ、日本をつなぐ博物館シンポジウムと国際協力を構想していた。そして、吉田教授と私が、カメルーン文化省の局長室に挨拶に行くことになったのである。

ここで話がまとまった後、3人ともにバムン研究者であるルンペット博士と夫人のアレクサンドラ博士と私は、彼の自動車で首都ヤウンデから3人の共通の調査地バムン社会の中心地フンバンに向かって、その走りをとにした。その時、日本人の名前の話が出た。「日本人の名前は、みんな子音と母音の連続だ」「これが特色だね」「WA・ZA・KI」「YO・SHI・DA」といって、その後、姓名を続けて「ワ・ザ・キハ・ル・カ」と発音し、続けて日本人の名前「イ・ナ・ダ コ・ウ・ジ」と発声した。「その通りだね、はっはっは」と私は答えたのだが、後のほうの発音が気にかかった。「イナダ・コウジ」。「えー、聞いたことがある名前だ」。「イ

ナダ・コウジ。稲田孝司だ」と心の中で呟いた。「ドクター・ルンペット、イナダ・コウジさんて誰なの?」「僕たち夫婦のパリ大学時代の唯一の日本人の同僚さ。もう20年ほど会っていないな」。考古学・人類学専門のイナダ・コウジは、稲田孝司に間違いなかった。岡山大学の稲田孝司教授その人のことであつた。私は、この3年ほど前に、国立歴史民俗博物館の都市民俗の共同研究で、バムンの王都フンバンのエスノグラフィーを発表して、共同研究者の稲田教授から講師依頼を受け、岡山大学にいくことになったのである。その時は、稲田教授はパリ時代の友人のことは話さなかった。だが、ここに、こうして、千葉・佐倉（歴史民俗博物館）－岡山－パリ－カメルーン－バムン－大阪（民族学博物館）が一挙につながるようになったのである。その後、吉田教授の招待によって、日本の国立民族学博物館で世界の博物館による文化表象論の国際セミナーが開かれたとき、私が橋渡しさせてもらって、ルンペット博士と稲田教授が六本木で20年ぶりの再会をはたしたのである。2人は、かつての若きパリ留学時代を懐かしそうに振り返り、旧交を新しい交流の再出発点としていった。

2 「知らない関係」と「知っていた関係」の逆転

2-1 消極的互酬性から普遍的互酬性へのメビウスの帯

カメルーンの英語圏第1の都市バメンダでのことであつた。私は、部屋履き用のできるかぎり安価なスリッパを買いにバメンダの中央市場にでかけた。何百という小さなブース状の店舗が集中しているなかで、何軒も靴屋を見て回った。値段も聞いて回った。そして、そろそろ購入しようと、ここが「ベラボウな値段ではないな」と1軒の店に入った。そして、交渉が始まった。アフリカでは、どんなに安いモノでも、定価はまず無い。非アフリカ人ともなれば、「金

持ち」だと思われ、途方もない値段をふっかけられたり、「騙される」ことがよくある。しかし、私は、それは文化を知るための誰もが払わねばならない授業料だと信じている。そんな簡単に異文化が判るはずがない。そこの考え方や習慣や価値観が判るには、時間もお金もかかるのだ。そこで、500~600CFA フラン（およそ100円）だろうなと想像しながら「300でどうだ」と切り出した。ここで、私を完全な新参者、観光旅行者とみるなら、笑ったり怒ったりを演じて「馬鹿にするんじゃない」とか言いながら「2000」ちょっとオマケして「1000だ」で始まる。だが、この場合は、「600と言いたいのが500にしておこう」と返してきた。なかなか「まっとう」である。私は、500なら買うつもりを心に決めながら、「400にしよう」「いや500」。この間に雑談も入る。「あんた中国人?」「いや日本人だよ」「ご主人さんどこから来たの?」「サントだよ（バメンダ郊外）」「あー近くだね。では450ではどうだ」。この応答が何度も続いた。そして、私は、昔を思い出しながら、こう話した。もう500フラン CFA がぎりぎりのところなんだろうな、と判ったからである。これで払うつもりで、ぼんやり話し出した。

「もう、30年も前のことだよ。私が若い大学のビンボー学生とき、隊長に進められて初めてカメルーンに勉強にやってきた。就職するまでお金もないから、研究費も宿泊も食費も全部節約してフンバンと首都ヤウンデで勉強していた。その間に、ヤウンデ大学の副学長（大統領が学長なので実質の学長）でアフリカ大学連合会長だったアノマ・ングーさんが、副会長のタンザニアのダレスサラーム大学学長と一緒に学術交流に日本にやってきた。アノマ・ングーさんは、その前は医学部長だった。列記としたお医者さんだ。そのとき、公式会議後のエキスカッションや東京下町案内は、当時カメルーン研究者のなかでもっとも若年で「下っ端」だっ

た私がその役目を仰せつかった。喜んでやらせてもらった。お寺や神社や歴史的な遺跡にお連れした。買い物のお手伝いや値段の交渉、いろいろやったなあ。日本じゃ、値段はあまり交渉しないんだよ。んー、だから、やっぱりスリッパ450でいいんじゃない。どうだい。それで、空港までお送りしたり、全部若手の僕がやったのさ。その後も、カメルーンには、毎年のように調査に来たから、いつもアノマ・ングーさんにはバストス（首都ヤウンデで外国大使館などが集中している高級住宅地）のご自宅に招待されて、貧乏学生にはありがたいご馳走をもらってたんだ。その後も、カメルーンと日本の交流協定があって、アノマ・ングーさんともよく連絡したなー。

それで、何年かして、またフンバン（私の調査地でバムン人社会の中心地）や村で調査して首都ヤウンデに戻ってきた。この年の調査も完了で後は帰国するだけ。お金もスッカランだった。だから、ヤウンデで1泊2000フラン CFA（400円）のホテル・オローラ Aurore に泊まってたよ。カルチエ・ブリケテリの角にある建物だよ。オジさんも、知ってるだろ。あのちょっと朽ちかけてるやつさ。帰国便の出発まであと1週間少々、辛抱だ。トイレもシャワーも共有で、ジメジメして暗かった。廊下が水気でびちゃびちゃしてた。食事も節約した。そのとき、熱が上がった。体温計40度。マラリアだ。がたがた震えてトイレにも這って行った。血尿も出ているようだ。お金もない。薬もあともう少ししかない。髪の毛を軽く引っ張っただけで、痛い。肘も痛い。高熱のせいだ。夜中トイレになんども這って行った。

翌朝、このままでは危ないと、アノマ・ングーさんのところに助けを求めにいった。電話番号も住所も知らなかったが、ヤウンデ大学当時の副学長の名刺は持っていた。だれもが所在を知っていた。なぜなら、その当時、アノマ・ン

グーさんは、厚生大臣になっていたからだ。そこで、会いたいのだが、厚生省の1階の受付で、みすばらしい格好の貧乏若者など、入れてくれるはずがない。門衛の軍人と何度か押し問答を繰り返しているうちに、秘書さんの電話番号をフィールド・ノートに書いた記憶が思い当たった。あった。受付から電話をかけてもらう。するとおそらく最上階近くからだろう、随分経ってから、秘書さんが下りてきた。フラフラだった。メモに「アノマ・ングー博士、マラリア、Help! Wazaki」とだけ書いた。そして、乗り合い安タクシーに転がるようにして乗り、ビンボーホテルに帰った。3時間ほどウトウトと休めたのだろうか、フロントから係りのおじさんが飛んできた。私をフロントまで連れていくと、なんと大臣用の公用車メルセデス・ベンツとアノマ・ングーさんが待っていた。「助かった」。私は、ベンツに乗せられて、高級住宅地バストスのアノマ・ングーさん宅に連れていってもらった。41度、39度5分、40度、こうした高い体温のとき、いくら栄養が大事といってもステーキやゴツい食事など一挙に食べられない。スープや果物など「心と身体を包む」「温かい」食べ物が必要なのだ。ちょっとずつ。それは、こういうアノマ・ングーさん宅のような個人宅でこそ、叶うものだ。ありがたかった。私は、結局10日間アノマ・ングーさん宅に居候させてもらった。ボーイがいて、なんでも聞いてくれた。助けてもらった。アノマ・ングーさんは命の恩人だ。だから、私はアノマ・ングーさんを「カメルーンの父」だと思っている。いつだって『父』と呼ぶ。

こう話していると、ふと周りを見た。靴屋のなかの空気が、重かった。主人と奥さんが神妙な顔つきをしている。静かな尊厳の空気が溜まっていた。静寂だった。自らに気づいて、主人は我に返り、私に近づき、やおら私が手にしていた「件のスリッパ」をもぎ取り、きりだした。

第1弾「ブラザー、これは無料だ」第2弾「払う必要はない」そして第3弾まで矢継ぎ早に出た。「あなたは、払ってはいけない」。「持って帰ってくれ」。なんということなのだろう。先ほどまで、500フランか450フランかで、日本円で考えれば、たった10円の違いで、まるで「命を懸けるような」戦いをしていた。意地のような競い合いの部分もあった。でも、今は違う。私と他者を結ぶものがある。主人と他者を結ぶものがある。私は、アノマ・ングーさんがサンタ出身であることなど、一言も発していない。私も主人もそのことを知っているのだ。過去のそれぞれの出会いが今の主人と私の出会いにつながっていることを、ともに知っている。値段の差が、10円だろうと、数万円だろうと、このときの私たちには関係なかった。これは、お互いに、タダで無料で持って帰らねばならないものだった。そういう関係を2人はすでに創っていた。値段などどうでもいい。「信頼」である。主人は、どこのホテルに泊まっているのかと問う。「モンディアルだ」と答えた。すると、夜、主人はモンディアル・ホテルにやってきた。私は食事を招待する。「次に来たときは、私の車を自由に使ってくれ。2台あるから」「それにガソリンだって気にすることないよ」と言って、主人は帰っていった。50フラン CFA, 10円のことでのぎを削っていた私たちは、車さえ無料のレンタルを申し出合う関係へと昇華した。自己の利益に閉じる消極的互酬性が、普遍的な互酬性へと止揚していった。個々の利益追求が、ともに過去の出会いというメビウスの帯に乗ると、するつと表から裏へ、裏から表へ、他者愛 Altruism へと変身した。

2-2 重積する出会いと循環

日本をアノマ・ングーさんがアフリカ大学連合の会長として訪問していたとき、東京にはカメルーンからの留学生ジョエア・ムシリ・ノエ

ルクロードさんが当時、在東京のただ一人のカメルーン人として、大阪外大での日本語研修を終えてアジア経済研究所で日本経済の研究を開始していた。アジア経済研究所には、セネガルやコートジボワール研究の原口武さん、エチオピア研究の細見真也さん、南部アフリカ研究の林晃史さんなどが在籍していた。カメルーン研究者は、いなかった。そのとき、私に一度ジョエアさんに会ってくれという要望が入った。電話でまず連絡した。カメルーンの何地方からきたのか、出身を聞いた。すると、彼はフンバンだと答えた。「バムン人だ!」と私は心の中で喜び跳ね上がった。民族数65とも数え方によっては200とも言われるカメルーンの諸民族のなかで、なんと私が研究しているバムン社会の出身者が、日本に来ていた。そこで私は「ムシャーシュ（こんにちは）」「ブサークゥ（ご機嫌いかがですか）」と矢継ぎ早にバムン語の挨拶を繰り返した。「クッ、クワ、クワ（な、な、なんだって?）」とフランス語で驚きをもった。そして、フランス語でなぜバムン語を知っているのか電話口であわてて私に聞いた。「マンシュ・クンジュ・ローサーケリ（長い間、バムンの都に住んでいるんだ）」。するとようやく我に戻って「ポーケリ・メンテン、アユレーニ（みな調子いい、ありがとう）」とついにバムン語で答えた。その後、ジョエアさんとは、カメルーンの運輸省に勤務時代にカメルーンの首都ヤウンデで、そして故郷フンバンで、ご母堂の葬送の儀礼で、さらには在イギリス・カメルーン大使館への出向時代にロンドンで、在日本カメルーン大使館勤務でと、世界の各地で交流を重ねてきた。彼は行政に係る国家公務員だが、私のカメルーン研究の共同研究プロジェクトの共同研究員と言う形で協力してもらったこともある。この東京留学のとき、カメルーンのアカデミズム界の指導者アノマ・ングー氏が東京を訪問していた。そこで、東京外大アジアアフリカ

言語文化研究所で開かれたシンポジウムとその懇親会で、東京にいる限られた2人のカメルーン人は、カメルーン調査隊長・富川盛道教授、副隊長・日野舜也教授のオーガナイズと私の案内の下に、出会うのである。東京でカメルーン人の2人は、故国への思慕を確認し合った。

この出会いは、これで収まらない。留学を完了し1年の後カメルーンに帰ったジョエアさんは、日本留学を糧にカメルーンの状態公務員の試験に臨んだ。運輸省を受験した。1次試験を終えた。向かった最終試験の面接官が、アノマ・ングー氏だった。当時、アノマ・ングーさんは、DEGEREST（Delegation General de la Recherche Scientifique et Technique: 科学技術庁）長官になっていた。日本での真面目な留学ぶりを知る面接官が、強くジョエアさんの勉学ぶりと力を保証したことは言うまでもない。こうして、日本とカメルーンの出会いの螺旋上昇の増幅のなかで、ジョエアさんはカメルーンの状態公務員の道を、カメルーンー日本を往還しながら歩いていくことになった。

2-3 増幅する出会いと循環

2011年夏、私は、中部大学の同僚・渡辺欣雄教授とカメルーンへの比較王国文化の調査を希望した5名のカメルーン研究家とともに、フンバンのバムン王国、英語圏・西カメルーンのパメンダにあるバフツ王国、ンクエン王国などの調査行に出ていた。首都ヤウンデに着いてから英語圏のパメンダに向かった。ここで、まず、バフツ王国に出向く。そして、バフツ王国博物館を訪ね、王国文化を見学する。日本に来ていたサミュエル元バフツ博物館長との出会いによって、バフツ王国へのアクセスが容易になっていた。

次の日は、ンクエン王国である。これも、日本に来ていた中古自動車業の経営者エリー（仮称）の故郷であり、王国を訪問するときは、い

つでも故郷の家を訪ねるよう言われていた。彼女の姉の家を訪ね、その長男が案内役となってンクエン王国の宮廷に向かった。彼の調整と折衝によって、ンクエンの王様への謁見・挨拶が可能になった。王様とともに記念撮影をとって、バメンダの宿泊地となる国営ホテルに戻った。

このホテルでの出来事である。ここで1泊して、次のバムン王国訪問へと向かう。夕飯を食べ、カメルーン研究家の仲間と渡辺教授は、教授の専門である中国王の文化との比較を飲みながら議論していた。そして、各自部屋に戻り、風呂に入ったりして疲れをとり、翌日のバメンダ中央市場の訪問と午後からのフンバンへの移動に備えたのである。すると、私の部屋に電話がかかってくる。渡辺教授と同じ階の部屋に泊まった一人からだ。渡辺教授が風呂で肘を怪我したという。急ぎ、1階フロントで会うことになった。彼は、自分で^{たすき}襷のような腕ツルシを作って、腕を支えていた。極端に腕が痛いという。汗も出たという。骨が折れているのではないかと懸念している。入浴し風呂で洗濯している合間に、滑って肘と腕と身体を強打したという。辛そうであった。とにかく、手持ちの痛み止めの薬を飲んで、明朝、私と教授だけ行動を別メニューにして、フンバンに出発する前に、可能な治療にあたることになった。

まず、近くのディスペンサリーで診てもらったが、「なんでもない」ということであつた。この見立てに満足しない教授は、整形外科の専門医を捜してほしいと希望した。さて、カメルーン4番目の都市に、そこまで細分化した整った医療体系があるか。そこで、日本での中古自動車業エリーのお姉さんに再度相談すると、ちゃんといた。専門医を紹介してもらった。念のためにレントゲンを撮ってもらう総合病院も紹介してもらい、まず、腕のレントゲン写真を撮りに行った。そして、そのレントゲン写真を持って整形外科の専門医のところに診てもらいに

行った。外科と整形外科を専門とする医師の名前はドクター・ニックと言った。後で名刺をもらったが、そこにも「ドクター・ニック」と愛称で書かれていた。患者と医者との関係によく注意を払っている人だ。語りが威圧的でない。外国人の初めてのカメルーン訪問だろうと、渡辺教授に親しみのある柔和な話しかけをしてかれている。いつ、どこで、どう打ったか。診察である。緊張を解きほぐそうとする語りである。教授の腕は、確かに腫れている。打撲ならいい。骨折だと、本人が心配する通り、調査旅行が続くから、ちょっとやつかいだ。「痛みの具合は？」「どのくらい？」「右に曲げてみて」と診察の問いが続く。では、やってみましょう、と整形外科医らしい腕をとっての右左前後ろに手を伸縮させて、具合を聞いた。最後には斜め後ろに腕を捻じ曲げて、痛みの度合と関節と骨の具合を診た。この間、2度3度と、レントゲン写真と照合しながら、診た。そして、もう一度最終的にレントゲン写真を見ながら、総合的に、「大丈夫、打撲です」と言った。渡辺教授の表情が、まだ不信の念があるような表情を浮かべつつも、和らいだ。ホッとした安心感が漂った。ドクターが、「鎮痛剤の（日本では最近あまりやらない）注射を打っておきましょう」と言うと、教授の表情はさらに安堵感をもつものになった。

そうだ、忘れていた、と言わんばかりに相互の紹介をやり直した。まずは、治療を急ぎ、あまり深く自己紹介を交換していなかったからだ。また、ドクターが社交的なパーソナリティで、彼から挨拶の交換を求めてきてくれたところもある。そこで、名刺交換とあいなった。ドクター・ニックは、やはり英語圏、西カメルーンの出身である。だが、医学のトレーニングは、フランス語圏のヤウンデ大学で受けた。アメリカにも行った。ドクターは、私のカメルーン通の深さに驚いた。バムン社会での長いフィール

ドワーク、バムン語を話せること、カメルーンにも知人が多いこと、を述べた。バムン社会でンジ、バンソー王国でシュンファアイの「王子」タイトルをもらったことも述べた。そして、医学の世界を思い出し、アノマ・ングーさんのことを切り出した。すると、ドクター・ニックが驚いた。「カメルーンにお医者さんが沢山いても、私とアノマ・ングーの関係を超越する医者はいないよ」と少し気色ばって主張した。「アノマ・ングーは私の師だ」、さらに「私はングーの一番弟子です」とさえ言った。私は、マラリアにかかったとき、どのように助けてもらったか、日本とカメルーンでングー博士とどのような交流があったかを、長々と述べた。ドクター・ニックは、笑いながら、喜びながら、しかし何かを囁みしめながら「私たちは兄弟だ」と呟いた。そして、テーブルの中から、急いで大事な書類を取り出し、私に渡した。いつもすぐそばに置いてある大事な書類に見えた。それは、ドクター・ングーの葬儀のときの儀礼パンフレットだった。アノマ・ングーさんの人となり、生い立ち、業績、成し遂げてきた事跡が書かれていた。そこには、筆頭に「一番弟子ニック」の挨拶、弔辞が印刷されていた。「これを日本に持って帰って」。彼は大事なモノを、カメルーンと日本をつなぐように、ングーさんそのものが今も日本に渡っていくように、願いを込めて私に託した。そして、医師の診療椅子のすぐ後ろの壁を指さした。渡辺教授の緊急事態にばかり気にしていたから、気づかなかった。そこには、ングー博士の温かい人格を記す似顔絵が付いた葬儀のポスターが大きく貼られていた。確かに「ドクター・ニックは息子だ」と思えた。私は、アノマ・ングーさんに娘さんがいてイギリス系の銀行に勤めていたことを、知っている。家族構成も知っている。こうして、バメンダに間違いなく「息子」がいた。

アノマ・ングーさんが私を救い、時を経て、

日本とカメルーンの往復を重ね今、その「息子」ドクター・ニックが渡辺教授を救い、ドクター・ニックと私は、会ったこともなかったのに、「兄弟」としての「再び」の出会いを確認したのである。時と場所を超えた出会いが巡り巡っている。バメンダから出国のために国際空港のあるドアラまで戻った私に、ドアラに店をもち日本-カメルーンをつないで中古自動車業を営む、自らもサンタ出身のオーウェン（仮称）は、この話に納得して“Life is Circle”と、邂逅の偶然を必然化してうなずいたのである。

3 世界をまたぐ邂逅のモノグラフ

2006年、私はベルギーに留学に来ていた。中央アフリカ研究で名高いブルッセル自由大学と王立中央アフリカ博物館に学びに来ていたのである。ヨーロッパの中は、国内みたいなものだ。ブルッセル自由大学の人類学研究所の研究休暇で、みな人類学者たちも1週間ほど旅に出ていた。ベルギー人の研究仲間ブティさんの「教会をぜひ見ておくといい」という見学の勧めもあり、名古屋大学で指導していたイタリア職人文化を研究していた大学院生杉本さつき君のお兄さん（ラヴェンナとブルッセル在住）にも会いたくて、私は、イタリアのラヴェンナに飛んだ。ラヴェンナは、西暦400年代に東ローマ帝国最後の都となったところである。したがって、教会建築など、目を見張るものがある。教会の天蓋を彩るドームに張られた削断タイルのモザイクを張り付ける宗教工芸は、宇宙を再現するような奥深さがある。歴史的には、ラヴェンナは、キリスト教工芸で有名だが、今日では、海岸部付近にいくつもの工場が立ち、ここにアフリカからの労働者も多数集まってきた。

東京・池袋でカメルーン人ジュリア（仮称）が経営するアフリカン・レストラン「O Village」で、六本木のバーで踊り子として働く

カメルーン女性のナイジェリア人のご主人に会った。ここで、踊り子の夫君がラヴェンナで働いていたことを知るのである。最初は、ボローニャで働いていた、と言った。だが、「ラヴェンナじゃないの」と私が聞くと、「よく知ってるな、そうだよ」と答えた。この近辺の大都市といえば、ボローニャだからである。当時、日本では、中田英寿がイタリア・プロサッカー・リーグのセリエAのボローニャでプレーしていたから、余計に日本ではボローニャのほうが知名度が高かった。

ラヴェンナには、このナイジェリア人夫君のように、アフリカ人が沢山集まってくるから、アフリカン・イスラームのハラレの肉を売る店とか、アフリカへの航空チケットを安く売り出す旅行店とかが、多数出店するようになっていた。入ってみるとセネガル人の店だったり、ウォロフ語も聞こえてきたりした。それは、肌の色と背の高さの特色からも類推のつく、確かにウォロフ人だった。ラヴェンナの駅前には、郵便局や公園など、やはり中心的な都市施設が集まっていた。当時は、メールよりも、安価な電話サービスがアフリカ人にとっては最も利用度の高いメディアだった。駅前の郵便局の隣には、安いアフリカ向けの電話屋さんが出店していた。日曜日、ここに何人もアフリカ人たちが「たむろ」して、母国への電話を終えて雑談していた。通りゆく女の子に声をかけたりもしていた。一人のアフリカ人が携帯電話に出ると、どこかで聞いた覚えのある言語である。私の得意なバムン語ではない。スワヒリ語でもない。これは、カメルーンの西部州のどこかの言葉じゃないのか、と私は思った。バミレケの言葉の可能性があった。

そこで、思い切って、私は彼の電話が終わると、聞いてみた。フランス語を使って「カメルーンから来たのですか?」。彼は、ビックリした。おったまげた。このイタリアのラヴェンナで、

「変な」東洋人から突如、村以外の自国内で使っていたフランス語で、母国カメルーンを言い当てられたからである。私のほうは、あのイントネーション、言葉の響きから、これはバミレケのどこかだな、とまで実は思っていた。バミレケという民族は、村ごとに独自のチーフや独自の政治体制をもって、言語もちょっとずつ違う。村ごとに、バフサン語、バハム語、バンジュン語などといった具合である。だが相互に似ていて聞き取り合える。やっぱりだ。「私も、今、カメルーンから来たばかりだ」。便宜上こう告げると、これまた、目の前にいる東洋人のオジさんとカメルーンとを結びつけるのに、当惑が走った。フランス語で「僕は、バムン人だ。君はバミレケだろう」とさらに畳み掛けると、これまた、彼はびっくりして奇声をあげ、一言も言葉を発せず、ただただ私に抱き着いてきた。ハッハハと笑い続けた。困惑と驚愕と喜びを隠すように、笑い続けた。そして「バンガンテからだ」と白状した。やはりバミレケ語の一つだった。私は、カメルーンで1970年代から30年以上カメルーン研究を続けていること、ヤウンデ大学と協力していること、私の指導下でバンガンテを研究している大学院生がいること、などを話すと、一層打ち解けた。

そして、そこにいた2人のアフリカ人の友人とわかれ、私たち2人の「カメルーン人」は、すぐそばのカフェに歓談に行った。私は、国籍が日本人であることを、かつてバンガンテには何度も行って昼食を食べたりお茶を飲んだりしたこと、を述べた。カメルーンの歴史からは、私のフィールドのバムン王国では、バムン王が近隣のバンガンテ首長領（チーフダム）と政治協定を結んで友好関係を築いてきたこと、また、バムン王セイドウの王妃の一人はバンガンテ・チーフダムからきており、バムンとバンガンテは兄弟関係にあること、こうした歴史を知っていることを述べた。すると、彼は、ちょっとバ

ツがわるそうに、バンガンテ語も話すが、あんたは知らないかもしれないバンガンテの街からもっと奥に入ったバチンギー村の出身であることを、述べた。バンガンテ語とバチンギー語はほとんど変わらない。言語は同じでも、村の政治組織はチーフダムごとにバンガンテ・チーフとバチンギー・チーフで別々、といった言い方もできる。

バチンギー村。これには、私の日本での歴史が絡む。1986年当時、私は神奈川大学でアフリカをフィールドとする人類学を教えつつ、母校の慶應義塾大学でも社会調査論やアフリカ社会論の授業を担当していた。この当時、日本には在カメルーン日本大使館の文部省留学生のプログラムが開始され、その栄えある歴史を刻む1期生として、慶應義塾と早稲田と小樽商科大学に留学生が派遣されてきていた。慶應には、ティモテ・チャグオさん、早稲田にはフランソワ・シェーンホアさんとクエジャさんであった。この3人は、修士課程でマスターの学位をとった。日本にいた間は、私の東京の家に招待もして食事を共にした。チャグオさんシェーンホアさんには、勤めていた神奈川大学のゼミナールに来てもらって、アフリカー日本の交流関係について講義してもらった。カメルーンの日系企業にそれぞれ、チャグオさんが首都ヤウンデの三菱商事、フランソワさんがヤウンデの住友商事、クエジャさんがカメルーンの最大都市ドアラの伊藤忠商事に就職した。日本人社長がカメルーンを離れると、3人とも現地法人の代表になった。野元美佐さんがバンガンテの研究を始めたこともあって、チャグオさんたちは、「故郷バンガンテ」を謳っていた。実際、言葉もそれで通じた。2002年、チャグオさんの父上が亡くなった。そのとき、その報を得た私は、丁度カメルーンに着いたばかりだったので、西カメルーンを研究する大学院生とともに、バンガンテに行こうとした。ルートや葬送儀礼の日

時など詳細を聞いてみると、祭儀が行われるところは、その奥に入ったバチンギー・チーフダムだった。この祭儀に出席した私は、日本からの賓客として、弔礼の挨拶を行うことになった。チャグオさんの日本での勤勉ぶりと慶應大学院での日本式経営をあつかった優秀な修士論文の内容と出来栄え、首都ヤウンデの三菱商事での活躍ぶり、などを込めた父上ビクトールさんへの弔文とした。私は、祭儀の主催者チャグオさんはもちろん、この3人に、彼らの故郷バチンギー村で何年ぶりの再会を果たしたのである。

出会いである。カメルーンの西部州にあるバミレケ首長領の領域には、10-20の主たるバミレケ首長領がある。だが、その奥に入ったバチンギー村の出身者に、日本とカメルーンとイタリアで出会うことになった。小さくともバチンギーを私はよく知っていることを述べると、これまた、イタリアのジョルジュ（仮称）は驚愕した。「行ったこともある」。チャグオという名前、シェーンホアという名前を挙げると、「確かにバチンギーの名前だ」と呟いて納得した。出会いを噛みしめた。「もう一人、村から日本に留学した奴がいたなー、誰だったかなあ？」とジョルジュは自問してうなった。私は、すぐに思い出さなかった。しかし、日本の商社の話が出るに及んで、伊藤忠を思い出し「そうだ、思い出したよ、クエジャだ」と言うと、彼もまた「そうだ、クエンジャだ」「クエンジャだ」と少し発音を違えつつ、バチンギーとラヴェンナと日本の偶然の繋がりに必然を感じ取って喜びを噛みしめた。この3人は、今、NPO カメルーン日本ハウスの中心人物となって活躍している。こうして、世界をまたいで、日本（名古屋ー池袋ー六本木）ーイタリア（ラヴェンナ）ーカメルーン（バチンギー）の出会いの連鎖が浮かび上がった。過去の出会いが、世界の隅々で、今の出会いを引き起こすのである。

4 日本人と日本人を引合す邂逅のアフリカー日本関係

埼玉県東武東上線の大袋にあるクリス・アフリカン・レストランは、アフリカ人が多く集う場所である。ナイジェリア・イボ人のエドクリスが経営している。店名もクリス・レストランである。ここは、東京圏で数少ないアフリカ人の寄り合い所である。名古屋の東山線・藤が丘でジェンベ太鼓の演奏を教えているセネガル人も、東京に着いたら、まずここを訪ねていた。「今日東京に着いた」という。東京でのアフリカに関わる仕事や知人や紹介等の情報を得ようとするのである。まず、ナイジェリア人が多い。イボ人次いでエド人、ヨルバ人の順である。ナイジェリアの政治的マジョリティ・ハウサはほとんどいない。日本人女性を連れてきているナイジェリア人も結構いる。

たとえば、2005年11月のことである。クリス・レストランを訪れたとき、ナイジェリア人の客が8名、カメルーン人の客が3名いた。日本人と判定できる客は、名古屋から来たカメルーン研究の私と、あと日本人と思しき1人の計2名であった。私は、カメルーン人とは、かれらにとって内的でエミックなフランス語で喋っていた。もう一人の日本人らしきほうは、英語が聞こえてきた。なので、ナイジェリア人と喋っているな、と想像できた。しばらく経つと、英語が終わりなにやら違う言語になった。耳をそばだてて聞くと、ハウサ語が聞こえてくるではないか。この日本人はハウサ語ができる。これは日本でも限られた人材である。そこで、失礼を顧みず、会話の合間を狙ってこの日本人にずーっと近づいて行って挨拶を試みようとした。日本人2人が顔を見合わせると、「あれ、和崎さんですか？」と尋ねてきた。私もグッと顔を見つめた。すと思い出した。「えー！、スレマヌかい？」「そうですよ」と松本君は言

った。私たち2人は、この時から数えて27年前に、「東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所でハウサ語研修集中コース」を2ヶ月間ともに学んだ、数少ない5人のうちの2人であった。当時のハウサ流の呼び名で私たち2人は、「スレマヌ」「モハマドゥ」と呼び合い、旧交を温めたのである。このときは、彼が文教大学教員、私が名古屋大学教員となって、ともにアフリカ文化を講じていたのであった。スレマヌは、一層ナイジェリア文化の研究を深め、私はカメルーン研究へと隣の国にシフトして西アフリカ研究へと広げていった。スレマヌも、この日初めてクリス・レストランにやってきた。私も1か月に1回来訪のペースであった。何回も行きあっているなかで、会ったのではない。アフリカ情報やアフリカの出来事が、日本人と日本人を呼び寄せたのだ。27年の時を経て、「アフリカを舞台」に吸い寄せられるように私たちは邂逅したのである。〈27年前の日本人－アフリカー27年前の日本人〉という出会いである。

むすびー往還的「邂逅エスノグラフィー」とフィールドワーク深化の相関

<Life is Circle> 「ライフ・イズ・サークル」

上智大学の田淵六郎教授とともに、カメルーン調査に出かけていた。首都ヤウンデから英語圏第1の都市バメンダに到着し、いつものことだが、ここでの都市民衆の生活を知るべく、定宿モンディアル・ホテルの朝食ではなく、街の安飯屋の朝食を食べに出かけたところだった。もっとも厳しい経済層の労働者たちだと、路上の店でパンにバターなりマヨネーズを塗ったものとネスカフェだけを食べるくらいだ。屋根が付いた店で、オムレツとパンとやはり練乳つきネスカフェくらいを食べられる経済層の人たちがやってくる「一般民衆」の食堂である。「あなたたちは、日本人ですか？」と英語で問いかけられた。「そうだ」と答えると、彼は日本滞

在歴があることを述べた。中古自動車業で日本で買い付け、カメルーンで売るといふ貿易業を営んでいる。50才代の年頃で、モーゼス（仮称）という自己紹介した。私たちも自己紹介した。日本の越谷や春日部という地名も知っていた。中古自動車のオークション会場に近く、カメルーン人やナイジェリア人が多く住むところである。越谷を知っているなら、大袋のクリス・レストランのことも知っているだろうと、そこで会ったコルヌやジョナスやナイジェル（仮称）の話をした。すると、モーゼスは驚いた。ジョナスは彼の弟であった。ジョナスとの出会いは、クリス・アフリカン・レストランである。ほとんどがナイジェリア人たちだった。イボ語が聞こえていた。テーブルが7つ8つあるなかで、日本人の女の子を連れてきていない1組があった。話そうと近づいてみると、「ドアラ」という地名が聞こえた。運搬輸送の話をしていた。これはカメルーン人だと、話しかけた。その2人がジョナスたちだったのである。彼らは私が長くカメルーンと往来していることに驚き、私が喋るバムン語に感心した。そして信頼を寄せた。カメルーンで会おうという約束もした。カメルーンでのジョナスの携帯電話の番号も聞いて知っていた。モーゼスと「よし、ジョナスに電話しよう」ということになった。私の携帯で、バメンダからヤウンデのジョナスに電話がつながら、彼ら兄弟もその場で語らった。「今度、バメンダで」と話して電話をおいた。

偶然的な出会いというものをどう考えるか。この事例と直前の大袋の事例では、他の出会い全体に言えるかまだ検討を要するが、一つの解釈が成り立つように思う。つまり、日本情報や日本資源にアクセスする人の一種の限定性の性質である。それは、大袋のレストランでは、日本におけるアフリカ資源へのアクセスと考えればよい。日本の車情報が限定情報であるがゆえに、これに絡める人は、儲けを計算できる。「日本車」

は儲けを呼ぶビジネスとして成り立っている。この街中の「一般」レストランでとはいえ、我われが食べた朝食をモーゼスは、出会いの喜びの下にご馳走してくれた。安レストランとはいえ、これにアプローチしうる経済層の人たちが、私たちも含めてここに集まってきていた。その枠の狭まりいく中で、私たちは出会った。この場合、偶然の出会いは、絞られていく close-knit な網の目の延長戦のなかで「必然的に」出会えた、とも言い換えられる。最近とみに増えていて、「道端で揚げパンさえ売って、カメルーンのマミーたちと競合する」とカメルーン人たちが評する中国人の印象像とは違って、「この人たちは日本人だろう」という確信に近い推測のもとに、モーゼスは声をかけえたのである。20数年前は、日本人、中国人は全く同一視されていた。これを峻別し判断する多くの情報を、多くのカメルーン人が得られている、まさに地球規模交流（グローバル）の日本ーカメルーン関係の時代だということである。

そうであるが故に、地道なフィールドワークが「効い」てくる。フィールドワークの重要性を再認識させる。慌てた、特にその時々のはやりの理論をかぶせて解いた論考は、いずれはがれる。あるいは、その部分がはがれてくる。思想もまた、実践との交流とその格闘のなかからせりあがらねばならない。年月をかけた生活への深化がそこにあるか、がやはり問われる。生き方や思想を呼吸しつつ、またそれと照らす営為を常に行いつつ、それを意味づけ肉づける、着実な人々への深化と人々との交接が、またさらなる出会い、再会、邂逅を生む。不思議な出会いと邂逅は、互いが必死に生きようとする、その接合点の実践と生活のあるフィールド性のなかから、生まれあがってくるのである。

もう一つ触れておきたい結論がある。それは、人類学モノグラフを埋める事項と邂逅による「データの質保証」の論点である。本論で論じ

たアフリカの人たちとの出会いの記述は、社会人類学が得意とし文化人類学がフィールドでチェックすべき民族誌を構成する諸文化要素の記述や説明ではまったくない。総合的なエスノグラフィーを書き上げるための構成要素の記述ではない。その互いの邂逅の記述は、個人の喜びや感情の範疇に入るものばかりである⁴⁾。これらは、決して、アフリカや、カメルーンや、バムンの人たちの衣食住や、社会集団や、宗教儀礼や、協力の形や、財の分配などを記述したものではない。であるのに、それが、カメルーン社会の文化の奥底に触れる、社会的諸事実の真実性や、生活の一生懸命度をどこかで表し「保証」している。むしろ、これは、それより一歩前に出て、私が長く生活と調査を繰り返し長年住んできたバムン社会の、生活性の有機的な全貌につながっている。上の出会いの記述は、カメルーンの人々の生活誌そのものに触れている。それを表裏一体で表現している。

岩田慶治は、今日までの科学的作業や学問がやってきたことは、社会や文化の構造を表わそうとして、布の上に染めた柄ばかりを語っているのではないかと問う。その布地がどのような材質でできているか、どう作られてきたか、どう織られているのかが大事になるという⁵⁾。布地にどう染まっているかも、その布地がどのようにできているか、に関わる。こうした観点からすると、その社会のリアリティは、日本から来た研究者とアフリカの人たちとの出会いのあり方に表裏でつながっている。

カメルーンやバムンの人たちと私の出会いを語れば、記述される者と記述する者の関係を越えた、生活グラフそのものが見える。そのカメルーンやバムンの人たちが形作る生活そのものに、私たち日本から遠く駆けつけた者さえ、参入し係わりそれを一緒に創り上げているのである。セレンデュピティの邂逅による「ライフ・イズ・サークル」を信じることができ実感でき

る者が、奥深い「ライフ・スタディの地続き」⁶⁾から私も出会い関わってきたその文化の生活相の絞り声をすくいあげ描くことができるのだろう。ここに偶然と必然の交叉がある。個人的出会いと社会のリアリティが、交叉する。こうして、科学（学問）と人生は交わるのである。

〈付記〉偶然の個人と個人の出会いが、30年も経ったとき、構造としての歴史を形作っていく。ここでは、その歴史生成の証人としての個人を意識して、わかる人物名は全て実名（数名は仮称、実名者は了承済み）で「現在モノグラフ」を記述している。

【注】

- 1) 和崎春日「アフリカの人たちとつきあい、その文化を描くということ」『アフリカ研究』赤阪賢・日野舜也・宮本正興編、世界思想社、1993年、157-168頁、参照。
- 2) 和崎洋一『スワヒリの世界にて』NHK ブックス、日本放送出版協会、1977年。
- 3) WAZAKI Haruka 'Multiplicity of Meaning and the Interrelationship of the Subject and the Object in ritual and the Body Texts' "Multiplicity of Meaning and the Interrelationship of the Subject and the Object in Ritual and the Body Texts" ed. by WAZAKI Haruka, 2008, Graduate School of Letters, Nagoya University, pp.13-25, 参照。
- 4) 松田素二は、大意として次のように述べる。アフリカ・マラゴリの人たちのリアリティを突きとめるべく、まず「どう喰っていくか」という生計維持やそのための社会関係を探った。何かが足りない。次に、逆に抽象度が高い宗教世界や儀礼を見た。何かが足りない。そして最終的に出会ったのは、松田自らも模索しぶつける生きがいや幸福という存在論だった。生きがいを重ねて事実を知るのである（松田素二「歴史と社会への民衆生活誌的アプローチ」赤阪賢・日野舜也・宮本正興編『アフリカ研究』世界思想社、1993年）
- 5) 岩田慶治『創造人類学』小学館、1982年。
- 6) 関根康正は、大意として次のように述べる。ルフェーブルにおいて〈都市的なもの〉の探求は〈生きられたもの〉の探求であった。人類学的アプローチがこれにふさわしい。ここでは、生活世界をそこでの生活者の眼差しにできるだけ接近し、個性をもった研究者自身の生活世界と重なる形で問題共有を図ろうとする。これはフィールド・スタディというよりライフ・スタディと呼ぶべきだろう。この両者の生活世界（人生とここでは私は呼んでいる）が重なるライフ・スタディの構えを関根は〈地続き〉と呼ぶ（関根康正「序論 〈都市的なもの〉を問う人類学的視角」関根康正編『「都市的なもの」の現在』東京大学出版会、2004年）。